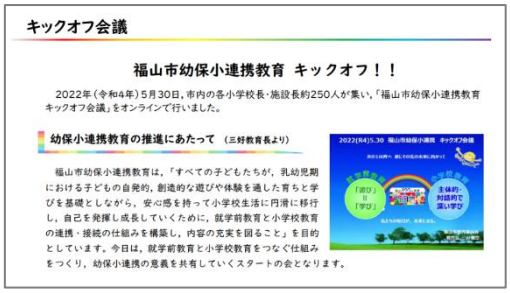
第 19 回福山教育フォーラム分科会

～ 福山市幼保小学びの接続カリキュラム開発校事業 ～

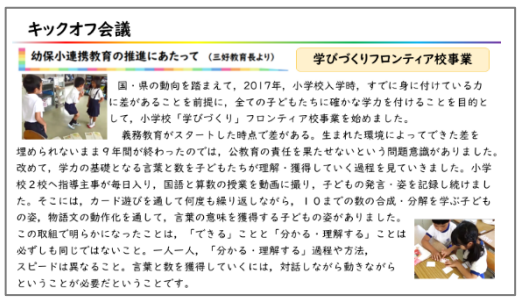
１ 福山市幼保小連携教育の推進に向けた今年度の取組

＊ キックオフ会議 ＊

この会議は，５月３０日，市内各小学校の校長先生，各園所の施設長の先生方約２５０人と，オンラインで行いました。この会議の詳しい内容については，先生方だけでなく，多くの方に知っていただけるように，福山市教育委員会 HP へ掲載しています。掲載場所は，教育委員会の HP を開いていただき，「学びの探究パイロット校事業」から「幼保小学びの接続カリキュラム開発校」を開いていただくと，キックオフ会議だけでなく，連携校区などの情報を見ていただくことができます。小学校の先生方は，端末上で共有しているパイロット校事業のフォルダからも，同様のものを見ていただけます。お時間があるときに，ご覧ください。



この会議では，まずはじめに，幼保小連携教育の推進にあたって，三好教育長が話をされました。福山市幼保小連携教育の目的は，「すべての子どもたちが，乳幼児期における子どもの自発的，創造的な遊びや体験を通した育ちと学びを基礎としながら，安心感を持って小学校生活に円滑に移行し，自己を発揮し成長していくために，就学前教育と小学校教育の連携・接続の仕組みを構築し，内容の充実を図る。」ことです。この目的を共有した後，国，県の施策を踏まえながら，「福山１００NEN 教育」のこの間の取組について話をされました。



幼保小連携につながる学びづくりフロンティア校事業の取組について話されたことを，ここで伝えさせてください。

国･県の動向を踏まえて，2017 年，福山１００NEN 教育２年目の年，小学校入学時，すでに身に付けている力に差があることを前提に，全ての子どもたちに確かな学力を付けることを目的として，小学校学びづくりフロンティア校事業を始めました。

義務教育がスタートした時点で差があります。生まれた環境によってできた差を埋められないまま，９年間が終わったのでは，公教育の責任を果たせないという問題意識がありました。

改めて，学力の基礎となる言葉と数を子どもたちが理解・獲得していく過程を見ていきました。小学校２校，これは南小学校と今日発表していただくパイロット校の光小学校のことです。

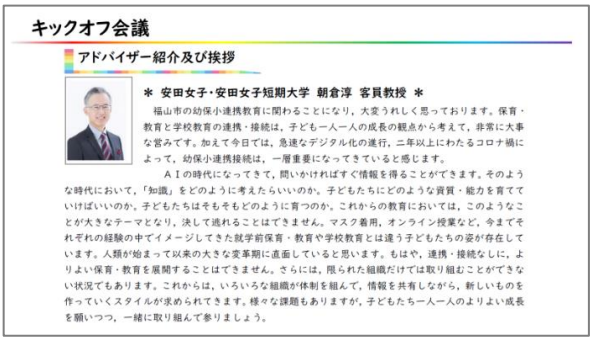
その２校へ指導主事が毎日入り，国語と算数の授業を動画に撮り，子どもの発言・姿を記録し続けました。そこには，カード遊びを通して何度も繰り返しながら，１０までの数の合成・分解を学ぶ子どもの姿，物語文の動作化を通して，言葉の意味を獲得する子どもの姿がありました。

写真を載せていますが，左上の写真は，友だちと音読劇をする中で，「うなずく」という動作を子どもが知った場面です。女の子の近くに行っている男の子は，この動作が「うなずく」だと捉えていました。友だちと動作化することによって，自分の捉え違いに気付き，言葉の意味を理解していく子どもの姿がありました。右下の写真は，数図カードを何度もめくって，２枚で「８」になるカードを見つけている場面です。「４」に何を足したら「８」になるのか。何度も指で一つずつ〇を数えることで，「４」と「４」で「８」だということに自分で気付いていきます。数の感覚を身に付けていくには，このような時間が大事なのだと思います。

この取組で明らかになったことは，「できる」ことと「分かる・理解する」ことは必ずしも同じではないこと。一人一人，「分かる・理解する」過程や方法，スピードは異なること。言葉と数を獲得していくには，対話しながら動きながらということが必要だということです。

フロンティア校事業で明らかになった子どもの学ぶ過程は，幼保小連携を進めていく上でも，大事にしていただきたいことです。今，伝えさせていただいたのは概要版の一部ですので，是非，全編を見てみてください。

三好教育長が話をされた後，福山市幼保小連携教育推進アドバイザーをお願いしている安田女子大学・安田女子短期大学の朝倉淳客員教授と慶應義塾大学環境情報学部の今井むつみ教授にご挨拶いただきました。


キックオフ会議

アドバイザー紹介及び挨拶

＊ 安田女子・安田女子短期大学 朝倉淳 客員教授 ＊

福山市の幼保小連携教育に関わることになり，大変うれしく思っております。保育・教育と学校教育の連携・接続は，子ども一人一人の成長の観点から考えて，非常に大事な営みです。加えて今日では，急速なデジタル化の進行，二年以上にわたるコロナ禍によって，幼保小連携接続は，一層重要になってきていると感じます。

ＡＩの時代になってきて，問いかければすぐ情報を得ることができます。そのような時代において，「知識」をどのように考えたらいいのか。子どもたちにどのような資質・能力を育てていけばいいのか。子どもたちはそもそもどのように育つのか。これからの教育においては，このようなことが大きなテーマとなり，決して逃れることはできません。マスク着用，オンライン授業など，今までそれぞれの経験の中でイメージしてきた就学前保育・教育や学校教育とは違う子どもたちの姿が存在しています。人類が始まって以来の大きな変革期に直面していると思います。もはや，連携・接続なしに，よりよい保育・教育を展開することはできません。さらには，限られた組織だけでは取り組むことができない状況でもあります。これからは，いろいろな組織が体制を組んで，情報を共有しながら，新しいものを作っていくスタイルが求められてきます。様々な課題もありますが，子どもたち一人一人のよりよい成長を願いつつ，一緒に取り組んで参りましょう。

キックオフ会議

アドバイザー紹介及び挨拶

＊ 慶應義塾大学環境情報学部 今井むつみ 教授 ＊

幼保小をつなぐ連携協議会が発足して，こんなにうれしいことはありません。これまで広島県の幼児・義務教育に関わらせていただき，幼保小連携の大切さを言い続けてきました。幼児の言語発達，概念発達という分野の研究から考えると，本当に当たり前のことです。小学校で楽しく学ぶためには，遊びや生活の中で，子どもたちが自分で育んだ言葉の力，知識を豊かに持っていることが大事です。幼児期の遊びを通して，数や量に触れ，考える機会があると，子どもは興味を持って，学校の算数，理科という教科に臨むことができます。

私は，小学生のつまずきの原因を明らかにするため，県教委と一緒に言葉と数に関する調査を開発しました。実施にあたっては，福山市教委にもお世話になり，小学生が言葉と数をどのように理解しているのか，衝撃の結果を得ることができました。先生方には，子どものつまずきを理解した上で，そのつまずきをほぐしながらも，さらに子どもが自分で考えるように導いていただきたいと思っております。それは決してやさしいことではありません。先生として熟練する必要があります。これまで福山市の多くの先生方と交流してきた経験から，先生方は，十分にできる資質・スキルを持っておられると私は確信しています。

幼保小連携によって，福山市の子どもたちが楽しく生き生きと学び，「学びが面白い」という気持ちをもって，広島県，日本を担う人材に育っていくことが，私の強い願いです。

最後に，連携協議会の立ち上げについて説明させていただき，キックオフ会議後から，連携校区の編成に向けて準備が始まりました。

＊　仕組みづくり　＊

仕組みづくり（連携協議会の設置）

【幼保小連携協議会】（連携校区）

校区	小学校	○公立幼稚園 ◆私立幼稚園	▽公立保育所 ▼私立保育所（園）	☆公立認定こども園 ★認定こども園 ■認可外保育施設	幼稚園等数
4	千田	○千田幼稚園	▼千田保育所	★あんずこども園 ■ルーゴ保育園	4
7	国泰		▼東国泰保育所 ▼つなぎ保育園		2
10	加	◆かるやか幼稚園	▽三吉保育所 ▼くるみ保育園	★みなとまちこども園 ■あなかの保育園福山	5
2	西	○西幼稚園		★もみじこども園	2
9	○新涯	◆のばら幼稚園	▽新涯保育所	★こどもえんつくし	4
10	久松台			■いっぽのいっぽ保育園	
11	明王台			■明王台チャーム幼稚園	1
3	南	◆聖園幼稚園	▽南保育所 ▼光園保育園 ▼子育て支援センター保育園	■福山記念病院わんぱく広場	5
3	川口	◆誠信幼稚園	▽多治米保育所	★川口西こども園	3

施設の種類	数
小学校・義務教育学校	72
公立就学前施設	55
私立就学前施設	102
計	229

小学校区を基本として
６３協議会を設置

キックオフ会議後，各学校・施設から送付されたアンケートをもとに，連携校区を編成しました。小学校・義務教育学校，公立・私立の就学前施設を合わせて，２２９施設が参加し，小学校区を基本として６３の連携協議会が立ち上がりました。

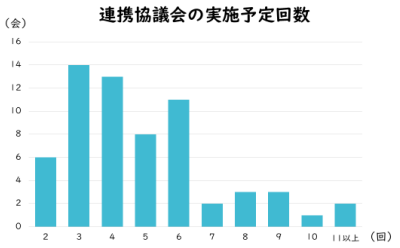
連携協議会の目的は，「一人一人の子どもの育ちと学びをつなぐ」ことです。構成員は，校長，施設長，連携担当者とし，連携担当者は，協議会の企画運営，カリキュラムの開発・改善，幼保小連携に関わる研修会への参加，他の取組の情報収集など，幼保小連携・接続の推進に向けて，中心的な役割を担います。

６月には，各学校・施設で連携担当者を選出し，報告していただいています。６月２８日の合同研修会では，連携担当者が中心となって連携協議会を行い，協議会後のアンケートには，今後の計画について答えていただきました。

各協議会の計画状況をお伝えします。協議会を実施する予定回数は，年間３・４回と答えてくださっている協議会が多かったです。協議する内容については，保育・授業参観は，すべての連携協議会で計画されていました。その他には，子どもの交流，カリキュラムの交流を計画されている協議会が多かったです。他の協議会の状況も参考にしながら，今後の協議内容を考えていただければと思います。

仕組みづくり（連携協議会の状況）

実施予定回数	校数
2回	6
3回	14
4回	13
5回	8
6回	11
7回	2
8回	3
9回	3
10回	1
11回以上	2



仕組みづくり（連携協議会の状況）

協議する内容

項目	協議会数（割合）
1. 保育・授業参観	63（100%）
2. 行事の交流	39（61.9%）
3. 保育体験	12（19.0%）
4. 個の子どもの交流	57（90.4%）
5. カリキュラムの交流	48（76.1%）
6. 指導要録・個別の教育支援計画等を活用した連携・接続	33（52.3%）
7. 学びの連続性を確保したカリキュラムの編成・改善	38（60.3%）

【その他の内容】
地域の方を交えた交流，児童が企画する幼児との交流会，講師による講演，指導・助言　等

＊　パイロット校区の指定　＊

パイロット校の目的は，「就学前教育と学校教育との連携・接続を発展させ，学びの連続性を確保するカリキュラムをモデル的に開発実践し，その過程や成果を全市に発信する。」ことです。

主な取組は，「計画的な幼保小連携協議会の開催及び内容等の研究」「生活科を中心とした合科的・関連的なカリキュラムや弾力的な時間割の研究」「遊びや体験を通して，教科横断的に言葉や数の概念を獲得するカリキュラムの研究」などです。

パイロット校区の指定

○　**指定校**

光小学校	霞小学校　西保育所　野上保育所 天使幼稚園　草戸こども園
緑丘小学校	緑丘幼稚園　福山りじょう幼稚園 ももやまこども園

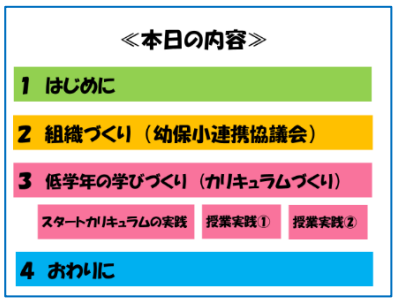
○　**コラボレーター**

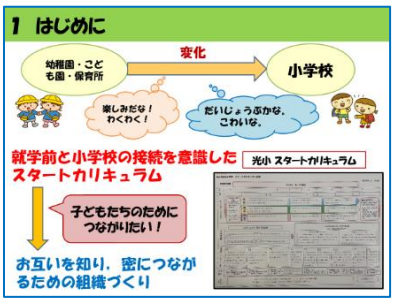
- **筒井　徳子**　学校指導員（元樹徳小学校長）
- **萩原由紀子**　学校指導員（元神辺小学校長）

元樹徳小学校長である筒井徳子学校指導員と元神辺小学校長である萩原由紀子学校指導員にコラボレーターをお願いし，光小学校区と緑丘小学校区をパイロット校区と指定しました。

それではこれから，光小学校区・緑丘小学校区の順に，実践発表をしていただきます。

2 実践発表 ～光小学校～





光小学校幼保小連携担当教員の石原亜希です。先ほど紹介がありましたように，本校では，５年前のフロンティア校事業から，子どもたちが学力の基礎となる言葉と数を獲得していくために，授業の中で対話しながら体験しながら学んでいく場を大切にしてきました。その実践をつないでいくよう，「幼保小学びの接続カリキュラム開発校」として，子どもたちの笑顔のかけ橋を目指し，連携接続のあり方を考え，取組を進めているところです。

←本日は，このような流れで発表し，おもに「３」の実践を中心にお伝えしていきます。

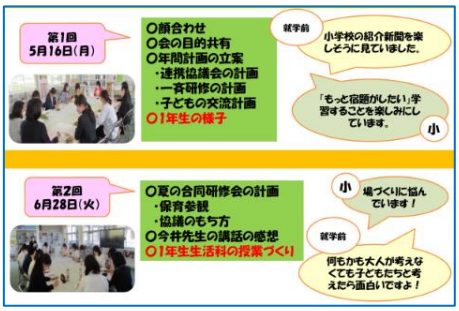
小学校入学を迎えるにあたって，子どもたちは楽しみな気持ちと不安な気持ちを抱えています。幼稚園・こども園・保育所から小学校への環境の変化は大きいです。本校でもスタートカリキュラムを作成し，なめらかな接続を目指していますが，さらに幼保小連携を強化し，子どもたちのためにできることを考えていきたいとの思いで，昨年度末から連携協議会を立ち上げる準備を行ってきました。

昨年度のコロナ禍での工夫です。オンラインで実施したスタート訪問では，慣れ親しんだ園所の先生に手遊びや読み聞かせをしてもらったり，応援メッセージを伝えてもらったりしました。交流は，感染状況を見極めながら，秋祭りやダンス交流を行いました。入学前には，学校生活を紹介するＤＶＤを作成し，各園所に届けました。幼保から小学校への丁寧な接続が安心感と期待感につながります。

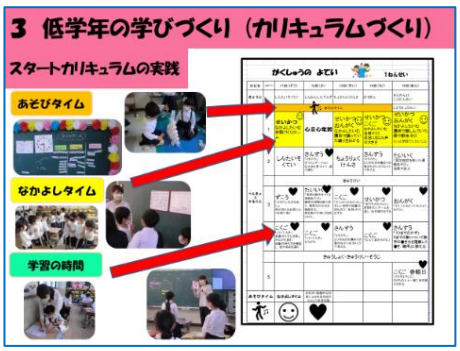
「小学校学習指導要領」では，「幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し，児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」と明記され，就学前と小学校の接続を充実させることが求められています。幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿として示されているのがこれらです。就学前ではこの１０の姿を意識した保育が展開されています。

←連携している４つの園所の子どもたちです。目を輝かせて遊びや活動に没頭しています。この遊びや活動の中に多くの「学びの芽」があると実感しています。わたしたちは幼児期の育ちを知り，日々の授業につなげていく必要を感じました。

取り組みを進めていくために今年度，まず組織をつくりました。「霞学区・光学区幼保小連携推進協議会」は霞小学校，西保育所，光小学校，野上保育所，草戸こども園，天使幼稚園で構成しています。光小学校を事務局とし，日程調整や協議会の進行，記録を行います。また連携通信「えがおのかけはし」を作成し，会の内容を各施設の職員に周知できるようにしました。



今年度 2 回協議会を行いました。1 回目では 1 年生の姿の交流を，2 回目では生活科の授業づくりの話をしました。学びづくり案と教科書をもとに協議を進める中で，幼保の先生方は，幼児期の経験が小学校でもつながっていくことを感じられていました。後ほど授業実践の中で紹介いたします。



ここからは低学年の学びづくりについてお話します。これは今年度 4 月第 2 週のスタートカリキュラムです。発達の段階の連続性を意識しています。オレンジが「あそびタイム」です。就学前の朝の自由遊びに似た時間で，折り紙やブロック等自分の興味に合わせて過ごします。黄色は「なかよしタイム」です。生活科中心の合科的な時間としました。ハートマークは学習の時間です。45 分間の学習の中で体を動かしたり，お話ししたり，書いたりする活動を組み合わせて行いました。

4 月は，スタート訪問を実施しました。就学前に親しんだ遊びをしたり，小学生になった姿を見てもらったりして，子どもたちは「たくさんの人に応援してもらっている」という実感をもちました。「つながり」を自分自身が実感することは，小学校生活のスタートにあたり大切なことだと思いました。

ここからは授業実践を紹介します。

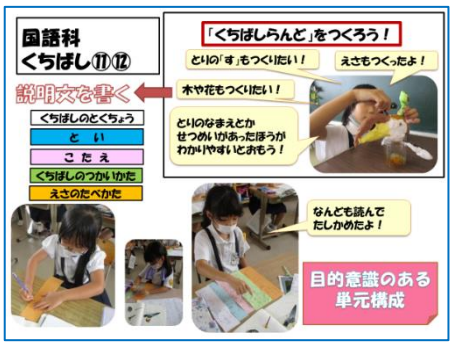
一つ目は，国語科「くちばし」の実践です。小学生になって初めて出会う説明的文章の「くちばし」と図画工作科を関連させて，活動しながら言葉の意味を理解していけるよう単元を構成しました。

←導入では，いろいろな鳥のくちばしクイズをしました。クイズを楽しみ学習への期待感が高まりました。子どもたちと話をしながら学習計画を立てました。学習のゴールを決める場面で子どもたちは，「鳥をつくりたい」と言いました。私は「くちばしクイズ」や「くちばし図鑑」をイメージしていましたが，子どもたちの「やりたい」を活かした授業を創りたいと思ったので図工と関連させて行うこととしました。

←②～④時間目は，教科書に載っているきつつき・おうむ・はちどりのペープサートを作って動かしながら内容を読みました。「するどくとがった」や「ふとくてさきがまがった」を捉えられるよう，ペアで対話しながら作りました。「するどくとがっただから三角に切ろうよ」等，言葉にこだわりながら読んでいました。また，ペープサートを動かしながらえさを食べる様子を表現し，くちばしの形が鳥によってちがうのは餌を食べやすくするため，つまり生きるためだと発言した子もいました。ペープサートという教具の準備が深く考えることにつながったと感じました。

←⑤⑥時間目は，「なんの鳥を作りたい？」と一人一人と対話をしながら，自分の作りたい鳥を決めました。そして，作りたい鳥の情報をワークシートに整理しました。１年生にとっては難しい活動でしたので，個別に支援を行いました。

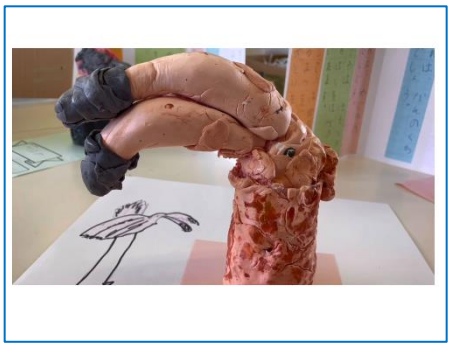
←⑦～⑩時間目は図工で鳥をつくりました。それぞれの個性を発揮して表現を楽しむ子どもの姿がありました。子どもたちは「みんなに自慢したい」「見てほしい」という思いをふくらませ，「くちばしランドを作ろう」となりました。「今日は，くちばしの勉強？やったー！」と学びを楽しむ子どもの姿に「子どものやりたいを活かしてよかったな」と私自身とてもうれしい気持ちになりました。



←⑪⑫時間目は，説明文を書きました。書く内容で短冊の色を変えて，構成を考えながら書きました。書くことはまだまだ難しい段階でしたが，正しい記述にしようと何度も書き直す姿がありました。ねばり強く最後までやり遂げる力も，幼児期の経験の中で身につけてきている子どもたちです。目的意識のある単元構成が子どもの高い意欲につながると実感した場面です。

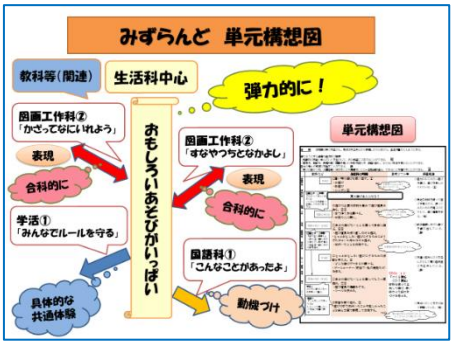
←さあ，「くちばしランド」の完成です。友達の作品を見ながら説明を読んだり，自分の鳥が餌を食べる様子を動作化したりしながら，楽しく学び合いました。全校にもよびかけて楽しい世界を見てもらい，子どもたちの心に残る学習になりました。

　それでは　みなさん，くちばしランドの様子を少しの間，ご覧ください。
←ここが「くちばしランド」です。
ペンギンのお腹を通って中に入っていきましょう。
くちばしランドに到着しました。



【子どもが書いた「くちばし」の説明文】
ふとくてさきがまがったくちばしです。
これはなんのくちばしでしょう。
これはフラミンゴのくちばしです。
フラミンゴはまがったくちばしを，みずのなかにいれます。
そして，みずをだしいれして，えさをくちのおくにおくり，のみこみます

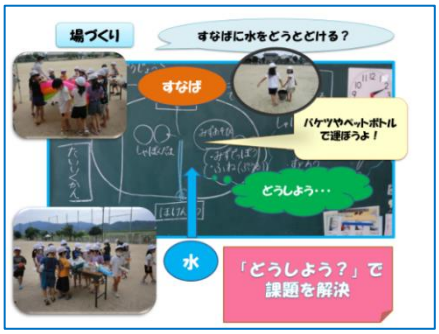
　二つ目の実践です。
　この実践は，生活科「おもしろいあそびがいっぱい」の単元を中心として図画工作科，学級活動，国語科と関連させたものです。



←「みずらんど」の単元構想図です。生活科の指導では，各教科等との関連を積極的に図り，両者の指導の効果を高めることが期待されています。
　本単元では，生活と図工を「表現」という部分で合科的に扱い，具体的な共通体験をする場として，学活で遊ぶ際のルールを話し合い，生活科の学びを動機づけとして，国語の書く活動と関連付けました。単元を構想する上で，大事だと感じたのは，「弾力的」という視点です。

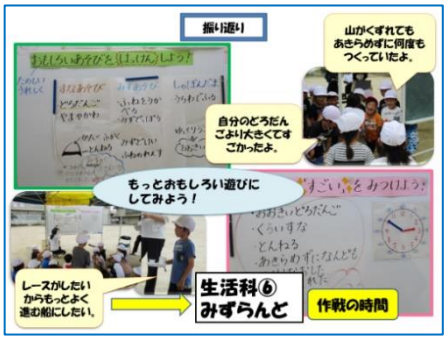
この学習は，就学前の先生の助言を取り入れた学習の流れです。単元の導入です。外で遊んで暑い大休憩後，「暑いとき保育所や幼稚園で何をして遊んでいたの？」　という発問をしました。子どもたちから経験したことがたくさん出てきました。どうやって実行するか，話し合いが始まりました。「水鉄砲作ったことあるよ！ペットボトルとストローがあればできるんよ！」「家でも集められるよ」と，子どもたちは口々に話しました。これまでの経験から「できそう」という気持ちが大きくなり，「1年生のみんなとやってみたい」という意欲につながりました。

←環境構成についてです。子どもたちがいつでも見たり作ったりできるように「みずあそびコーナー」を作りました。本や材料を種類ごとに分けて配置しました。幼保で培った一人でも集中する自主性や役割分担して作る協同性が主体的な学びへつながっています。指導者に助けを求める場面はほとんどありませんでした。指導者が行ったことは，教室を回り子どもと対話したり，一緒に遊んだりすることです。

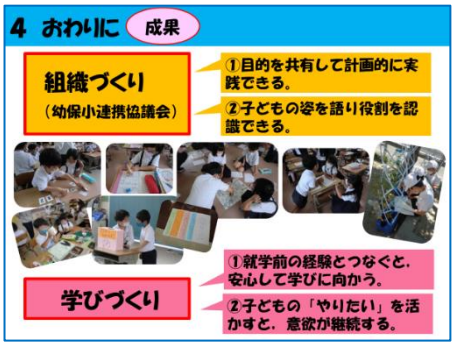


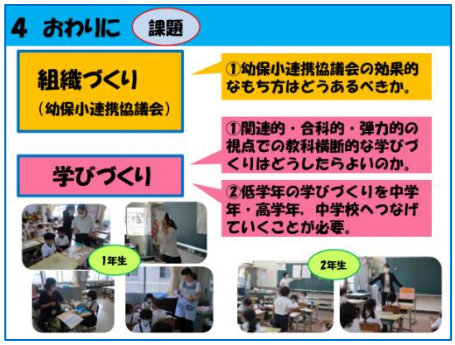
←次は場づくりです。就学前の先生から「場づくりも子どもたちと対話して決めますよ」と聞きました。そこで，ホースの水はどこまで届くのか，子どもたちと一緒にやってみました。すると，運動場の真ん中までしか届かず…どうしよう…　子どもたちは「バケツやペットボトルで運ぼうよ」と話し合いました。無茶なことは何一つ言いません。環境を見て，できる範囲で楽しむ，工夫することも身につけて小学生になっています。

←いよいよ「みずらんど」の日です。水あそび・砂あそび・シャボン玉あそび…自分の選んだ遊びを楽しみました。どのコーナーも友だちとの会話が弾み，遊びを発展させる姿や友だちから学ぶ姿がたくさん見られました。暑い夏，思いっきり「自然とのかかわり」や「友だちとのかかわり」を楽しんだ子どもたちは，この後の活動でも「表現力」を磨いていくこととなります。



←振り返りです。遊んだ気付きを交流する中で，「もっともっとおもしろい『みずらんど』にしたい！」と子どもたちが言いました。遊びを工夫・発展する姿を期待して，次の１時間は作戦の時間としました。





２回目の水遊びの時間です。いろいろな遊び方を試したり，友達と新しい遊びを生み出したり，遊びを発展させたりしました。疑問をもとに試したり，修正したりしながら子どもたちは「思考力」を身につけています。

この遊びの共通体験を，国語の書くことと関連させました。「みずらんど」での楽しかったことを書くという学習です。「どんな題名にする？」と聞くと，楽しかった体験が題名にも表れてきました。表記のミスはあるのですが，どの子も「楽しかった体験を書きたい」という気持ちがあふれていました。この「みずらんど」の単元を通して，子どもたちは様々な力をつけました。それはいろいろな教科・領域を関連付けて単元を作ったことが要因だと捉えています。

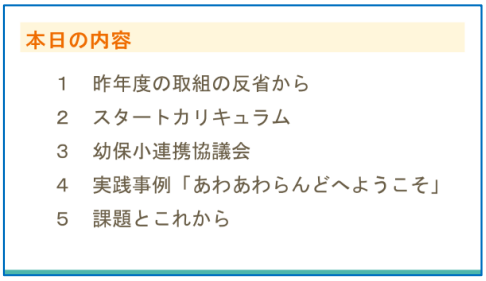
終わりに「成果」と「課題」をお話しします。

まず「成果」です。組織づくりでは，組織をつくったことで，目的を共有して計画的に実践できるようになりました。また，顔見知りになり，子どもの姿を語ることで互いの役割をより認識できるようになりました。学びづくりでは，就学前の経験とつなぐと，安心して学びに向かうとわかったことです。また，子どもの「やりたい」を活かすと意欲が継続することもわかりました。

一方で課題もあります。就学前と小学校の接続の部分だけにとどまらず，子どもの課題や伸びを語り合い，実践に活かすことができるような内容にしていくには，協議会をどのような内容にすればよいか，どのような連携をしていくことが効果的なのか，まだまだ手探りの状態です。学びづくりについては，主体的・対話的で深い学びの実現に向けて，子どもたちの「やりたい」を活かした教科横断的な学びを考えることがまだまだ難しいです。関連的・合科的・弾力的という視点で，２学期以降の単元を子どもたちと共につくっていきたいと思います。また，就学前の子どもの姿を知り，小学校低学年の学びにつないでいくこと，低学年の学びを中学年・高学年，そして中学校へつなげていくことが必要です。

就学前教育と小学校教育が連携・接続し，子どもたちが安心してのびのびと学びを楽しむ姿を目指し，これからも研究・実践を進めていきたいと思います。

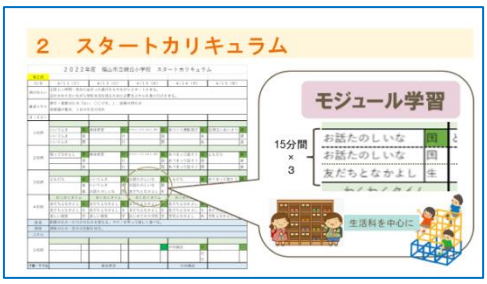
2 実践発表 ～緑丘小学校～



緑丘小学校の幼保小連携担当教員の頼政佳代子です。よろしくお願いいたします。これから，今年度のこれまでの幼保小連携に関わる取組と課題，そしてこれからについてお話をさせていただきます。
←今日お話しするのは，次の５点です。

昨年度は，緑丘幼稚園との連携を中心に行ってきました。昨年度の取組について，成果は，交流を通して子どもたち同士の繋がりができたことです。課題は，小学校の教員と幼稚園・保育所・こども園の教員のつながりが十分にできなかったことと，「学びを繋ぐ」ことが十分にできていなかったことです。

今年度は，遊びの中にある学びを大切にして，幼稚園やこども園と連携を図りながら，子どもたちの思考がスムーズにつながるカリキュラム作りを中心に，「学びを繋ぐ」ことを考えています。

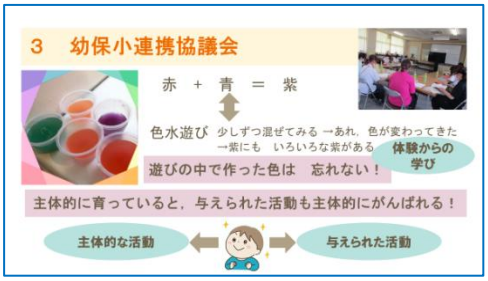


本校では，昨年度末にスタートカリキュラムの作成を行いました。今年度は，そのスタートカリキュラムをもとに，児童の実態に応じて修正を加えながら，授業を行っています。 45 分間の授業時間を 15 分間ごとの３つに分割し，モジュール学習を組みました。入学して最初の１週間は，小学校生活に徐々に慣れていくことができるように，生活科を中心に他教科と組み合わせて学習を行いました。

例えば，生活科「友だちとなかよし」と国語科「集まってはなそう」と組み合わせて，１時間の中で，自分のことを話したり，友だちのことを知ったりする活動を行いました。教師は，それぞれの教科のねらいを明確にもって授業を行っていますが，児童にとっては，「ここからは国語科」「ここからは生活科」という区切りはありません。45 分間の授業内容に対して興味関心をもって取り組めるように工夫しました。

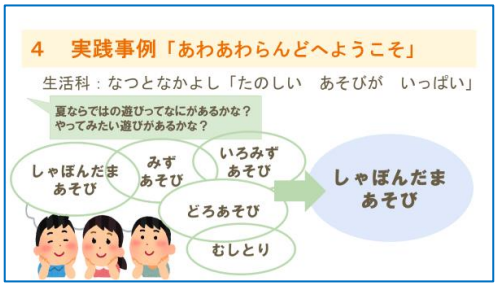
今年度，緑丘小学校は，緑丘幼稚園，ももやまこども園，福山りじょう幼稚園，福山第一病院おひさまの４つの園と連携を行っています。連携協議会は，「幼稚園やこども園での遊びや体験を通した育ちと学びを基盤としながら，子どもたちが安心感をもって小学校生活に円滑に移行し，成長していくために，園と小学校が連携・接続の充実を図る」ことを目的として，進めています。

６月の連携協議会では，小学校や幼稚園やこども園での取組を交流しました。各園では，遊びの中に意図的な活動や支援をされておられました。例えば，カレンダーを見る習慣を付け，毎日日付と曜日を唱えたり，日直がカレンダーの日付を変えたりする場を設定したり，さつまいもの収穫で，さつまいもを並べて数えたり重さ比べをしたりする活動の場を設定したりされていました。子どもたちが数に触れる場を，日常生活や遊びの中にたくさん取り入れられていました。学びと育ちを繋ぐために，就学前にどんな経験をしてきているのかを知ることは，児童の知的好奇心をくすぐるような教材や声掛けを準備する手がかりとなり，とても有意義な会になりました。

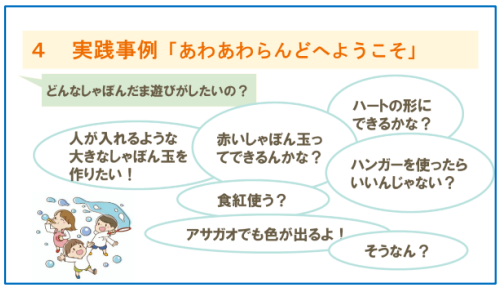


幼稚園やこども園での実践をお聞きする中で，心に残った言葉が２つあります。１つ目は，「遊びの中で作った色は忘れない。」ということです。混色を学習するときに，赤と青を混ぜると紫になることを教えられて覚えたものと，水遊び等で偶然できた紫を少しずつ色を足したり水を足したりしていき，同じ紫でも違いがあることを感じた体験とでは，質が変わってくるということでした。このことは，混色の学習にはとどまらず，数の概念など色々な学習に通じていて，これから作っていくカリキュラムづくりで，体験を通して，確かな力をつけていくことを念頭におかなければならないことだと思いました。もう一つは，「主体的に育っていると，与えられた活動も主体的にがんばれる」ということです。主体的な活動と与えらえた活動は相反する活動と考えがちですが，必ずしもそうではなく，子どもたちにとって与えられた活動であっても，子どもたち自身が学びに意欲をもっていれば，その学習活動は主体的な活動になるのではないかという話になりました。

連携協議会での内容は，幼保小連携通信「きらり」を発行し，各園に届けたり，校内での共通認識を図ったりしました。



連携協議会で，幼稚園やこども園の先生と連携したことを踏まえ，生活科「夏となかよし」の中のシャボン玉遊びの実践を紹介します。子どもたちに「夏ならではの遊びって何がある？」「やってみたい遊びがある？」と問いかけると，たくさん出てきました。子どもたちとの話し合いで，シャボン玉遊びをすることになりました。



「どんなシャボン玉遊びがしたいの？」と問いかけると，「ハンガーを使ってシャボン玉を作りたい！」「人が入るくらい大きいシャボン玉が作りたい！」「赤いシャボン玉ってできるんかな？」「食紅入れたらいいんじゃない？」と次々と子どもたちはキラキラした目で語り始めました。子どもたちの発言を聞く中で，シャボン玉作りは初めてではなく，園でも行ってきた遊びであるとわかりました。子どもたちが，今までにどのようなシャボン玉遊びをしてきたのか知りたいと思いました。そこで，今回，シャボン玉作りをするにあたって，入学前の子どもたちがどのようなシャボン玉遊びをしているのか，また園の先生方がどんな工夫をされていたのか，各園へ伺い，話を聞くことができました。

緑丘幼稚園では，石鹸をおろし金でおろして石鹸水を作りシャボン液を作ったり，その中にアサガオやクレープ紙を入れて色水感覚で遊んだりしていたということ。ももやまこども園では，市販のシャボン液を使い，活動の時間を充分に確保し，子ども同士の関わりを大切にされていること。福山りじょう幼稚園では，シャボン玉の材料をバイキング形式にして，自分たちで配合を考えさせていること。

異なった活動経験を重ねた子どもたちが，緑丘小学校で共に学んでいくので，そこに教え合いや学び合いがあるのではないかと考え，今回の生活科「夏となかよし」（シャボン玉遊び）の目標は，「自分が作りたいシャボン玉を道具や材料を工夫して作ることができる。」とし，バイキング形式でいろいろなものを用意して，子どもたちに自由に道具や材料を選んで活動できるようにしました。

シャボン玉づくりの活動の様子です。【動画】

せっけんや水，のりの量について，友だちと対話しながら，試行錯誤してオリジナルのシャボン玉液を作っている子どもたちの様子。

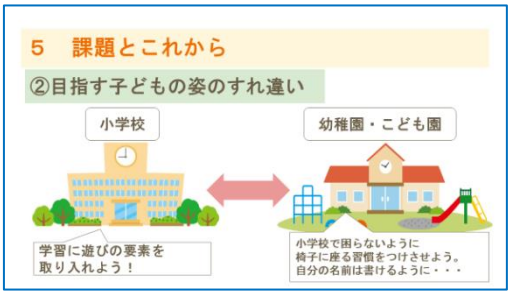
今までだと，「これぐらいの洗剤を入れて，これぐらいののりを入れて…」とついつい子どもが失敗しないようにシャボン玉液を作らせたり，道具を一斉に作らせたりしていました。自由に活動することで，作りたいシャボン玉にあわせて道具を工夫したり，赤いシャボン玉を作りたい子は，幼稚園での経験を生かし，育てているアサガオの花をちぎってシャボン液に混ぜてみたり，近くの友だちのアドバイスを聞いてのりを追加して割れないシャボン玉液を作ろうとしたりしていました。

どの子も最後までずっと「シャボン液を作る」「シャボン玉を作ってみる」「改良を加えてみる」を繰り返し，絶えない活動意欲のもと楽しく「あわあわランド」を展開しました。

シャボン玉遊びの後は，国語科「こんなことがあったよ」で，経験したことについて必要な事柄を集め，伝えたいことを絵日記に表す活動を行いました。心踊る活動だったので，ウエビングマップにどんどん伝えたいことを表していき，文章にすることができました。

就学前の取組を聞かせていただく中で，２つの課題が出てきました。１つ目は，私たちは子どもたちの主体的な活動を目指しながらも，今まで続けてきたことにとらわれていて，子どもたちの活動を限定してきてしまったのではないかという課題が見えてきています。たとえば，一律にあさがおを育てる必要があったのかどうかということです。すでに他の学校で実践されているところもあると思いますが，あさがおだけでなく，ひまわりやマリーゴールドの種を用意し，すぐに図鑑やタブレットで調べられる環境を用意しつつ，育てていく過程で他の花との比較をすることで，多くの発見ができたのではないかと思います。

２学期の取組としては，この反省を生かし，花を育てる活動では，幼稚園の取組を参考にし，一律に花を育てるのではなく，A，B，C の正体不明の花の種から１つ選び，自分の花は何が咲くのかを考えたり調べたり，友だちの花との比較をしたりして，自分が育てる花に興味関心をもつような学習を考えています。こうした学びは３年生以上の理科の学習へつながるものと考えます。



２つ目として，幼稚園やこども園と小学校の間で，めざす子どもの姿にすれ違いが生じているのではないかという課題です。幼稚園やこども園の先生の話を聞く中で，小学校は園の取組を参考にしながら，学習に遊びの要素を取り入れようとしている一方で，園では小学校へ行って困らないように椅子に座って学習に取り組んだりすることを取り入れておられることも分かりました。幼保小の連携不足によって，子どもたちにとってのギャップや生活のしにくさが起こり，結果として子どもたちの負担につながらないように，さらに幼保小の連携を深めていきたいと思っています。

２学期以降の幼保小連携の取組としては，９月の連携協議会で，言葉と数の調査から，児童の実態を幼保小で把握し，お互いにどのような取組ができるかを考えていきます。また，２学期には，児童が主体となり園児を招待して秋祭りを運営したり，３学期には，小学校の教員が幼稚園やこども園での出前授業を行うことで小学校への期待感や安心感を高めたりしていく予定です。そして，生活や遊びを通して，子どもたちが知っていることを学びにつないで，日々の授業改善に取り組んでいきます。

まだまだ，始めたばかりのスロースタートです。低学年の子どもたちが安心して小学校生活をスタートさせ，キラキラした目で主体的に学習する環境をつくっていくために，幼稚園や保育所・こども園から，学ぶべきことはたくさんあります。幼保小の日常的な連携を深め，子どもたちの学びをつないでいく取組をすすめていきたいと思っています。

３ 質疑・応答

学校 A　２校の実践を拝見させていただき，子どもたちの思いや発言をもとに，学習を展開していることのすばらしさを感じて，とてもわくわくしながら見させていただきました。質問なんですが，校内で子どもたちの思いを大切にしようと思うと，どうしても学級ごとに差が出てしまって，保護者に「何か持ってきてください」とお願いするタイミングがずれてしまったりすることが，不安を与えるのではないかなと，やりながら考えながらちょっと悩んでいるところです。学級間の連携はどのように行われていたの

か，もしくは，バラバラになってもいいということで取組を進められていったのかを教えていただきたいです。よろしくお願いします。

光小　光小学校では，最初「やりたい」と言ったのは，うちのクラスです。２クラスあって，１組は，くちばしクイズを最後のゴールにやりました。２組は，「鳥を作りたい」というので，鳥を作ったのですが，２組がやっているのを見て，１組でも「やりたいな。楽しそう」という意見が出て，１組２組みんなでくちばしランドを作っていこうという話になりました。結局，１組も２組も同じことを今回は取り組みました。

緑丘小　今回，お伝えしたシャボン玉遊びでいうと，例えば，私のクラスは「あわあわランド」だったんですけど，他のクラスは，「あわあわパーティー」とか，そういうところで各クラス違うところがありました。シャボン玉遊びについては，水遊びをいろいろやっていたのですが，どこのクラスも偶然シャボン玉遊びに落ち着きました。持ってくるものや，いろんな細かいところの違いはありましたが，そこは各学年，各クラスで一緒に学年会で話をして，共通する部分は共通するところで，保護者にメール配信で持ってくるものを伝えています。細かいところの違いについては，子どもや各クラスのメールでお伝えして，なるべく子どもたちがやりたいことができるようにしました。

学校 A　ありがとうございました。子どもたちの思いを大事にしながら学年で連携をすることが大切だということがわかりました。

市教委　学級ごと学年ごとでやっていくのかどうなのかということではなく，子どもの思いを大事にしながら考えていき，それを保護者の方に伝えていく。子どもの声を聞きながらやっていくことで，保護者の方の理解を得ていくということですね。

学校 B　今日は光小学校，緑丘小学校の先生ありがとうございました。２点聞きたいことがあります。まず１点目は生活科についてです。本校の一年生の生活科では，水遊びを２学期に計画していて，これから計画を立ててやっていこうと思っています。シャボン玉をやっていきたいと考えているんですけど，今日の実践発表の中から，目的，ゴールを明確にして，場の設定をしっかりやっていって，大人が手，口を出さずに活動させるということが大事だとわかりました。今後その授業をやっていく中で，子どもに失敗をさせることも大事だと思うんですけど，どのような失敗があって，そこをどのように教員がフォローしていったのかというところをお聞きしたいです。まず１点目，それをお願いします。

光小　光小学校では，シャボン玉遊びだけでなく，砂遊びと水遊びを自分で選んでできるようにしていたので，シャボン玉での失敗はあまり見られなかったです。２回遊びをすることで，１回目は小さいシャボン玉しかできなかったけど，２回目はもっと大き

いシャボン玉にしたいということで，１回目より大きいシャボン玉を作れるように道具を工夫していきました。

緑丘小　緑丘小では，泥遊びを５月ぐらいにして，例えば型を使った山とか，いろいろ作りたいという子たちがいたときに，上手くできない子がやっぱりいるんです。サラサラの砂でやってしまって，上手くできない子がいたときには，ちょっと大きな声で，「あら？出来ないの？」「え？どうやったらいいかな？」と言うと，他の子が来て，アドバイスをしてくれます。「ちょっと水を入れたらいいよ」と言ってくれたりして。シャボン玉の時も，なかなか上手くいかないグループがあったんですけど，「あのグループ上手くできてる。すごいな！」というと，聞きに行ったり，「できないの？教えてあげる！」という感じで教えに来てくれたり。意外と子ども同士で，「こうしたらいいよ」という言葉が出て，何とかみんなのやりたいものを作ることが今のところできています。

学校Ｂ　あともう１点，国語科について質問があります。光小学校の国語科の取組，すごい楽しいな，ワクワク感があるなと思って聞かせていただきました。お聞きしたいことは，くちばしの模型を作ったりする活動は，子どもたちがわくわく楽しくしてると思ったんですけど，書く作業になった時，書くことについては，個人差が随分あると思います。その個人差がある中で，限られた時間の中で，どのように個別の支援をされたのか，具体がありましたら教えていただきたいと思います。

光小　　くちばしの単元では，子どもたち一人一人が自分の作りたい鳥を調べるときに，図鑑が数冊しかないので，一人ずつ図鑑をカラーコピーをして，自分で調べてできるようにしました。あとは，やっぱり書くことがなかなか難しい子が多いので，色ごとの短冊に分けて，一つずつ一緒に書いたり，そばにいて書いたりというような支援をしていきました。これは，子どもが書いたものなんですけど，くちばしの教材文のように，最初は「くちばし」について，次に「問いと答え」というように，書く内容ごとに色を変えて，書けるようにしていきました。

学校Ｂ　ありがとうございます。書くことについて，子どもが書けるようにいろいろ工夫されているなと思ったんですけど，文字を書くことが難しいというお子さんがもしおられたら，そのお子さんについての支援がありましたら，その点もお聞かせいただけると嬉しいんですが，いかがでしょうか。

光小　　まだひらがなが覚えられていなくて，マスにあった字を書くことが難しい子もいたんですけど，５０音のあいうえお表を準備しておくと，自分で自分の書きたいひらがなを見つけながら，すごくその子は意欲的に調べながら書いていました。他の子たちも，「自分が，作りたい。調べたい。」という気持ちがあるので，結構みんな意欲的に，取り組んで頑張って書いていました。

学校Ｂ　ありがとうございました。やっぱり意欲が大事なんだなということがわかりました。

市教委　ありがとうございます。１点目の「失敗をさせる」ということですけど，「失敗をさせる」ということもどうなのか。先ほど，緑丘小学校の発表の中で，シャボン玉の動画を見ていただきました。画面に映っていたシャボン玉液を作っている子の周りでは，きっとたくさん大きいシャボン玉ができていっていたのだと思います。「でっかい！でっかい！」という声が聞こえていましたので。でも，画面に映っていたグループは，シャボン玉はできていなかったんですけど，ずっとシャボン玉液を作っていました。

あれを「失敗」というのかどうなのか。何をもって「失敗」となるのかということも，子どもがやってることを見ていきながら，こちらが考えていかないといけないと思います。

くちばしランドは，私も光小へ実際を見に行きました。先ほど先生が言われたように，一年生の１学期ですので，書くことが難しい子は多くいると思います。そこを書かせたというよりは，「書きたい！自分たちが調べたこと表したい！」という気持ちから，子どもたちが字を書くことに向かっていったんだなということが表れている場だと思いました。

チャットが１つ届いていますので紹介させていただきます。「低学年だけでなく，中高学年も教科横断的に活動を組み合わせ，本物に触れる機会を作ること，何度も試したり体験する主体的な活動を取り入れること，知識や経験とつなげることは，子どもたちがわかる，理解する，もっとやってみたいという子どもたちの学びの質を上げることにも繋がっていると感じました。」という感想をいただいています。ありがとうございます。

・・・・・・・　休　憩　・・・・・・・

市教委　これから朝倉先生のお話を聴いていただきます。実は，朝倉先生が，この時間のオンライン参加が難しいということで，今日は，事前に収録した動画を流させていただきます。先週，光小と緑丘小の実践を見ていただき，それを踏まえて，「一人一人の育ちと学びがつながる幼保小連携」というテーマでお話してくださっています。今から，その動画を流します。

4 講話「一人一人の育ちと学びがつながる幼保小連携」（朝倉淳 客員教授）

福山市のフォーラムで，皆様と一緒に幼保小連携について考える機会を得まして大変うれしく思っております。本日の講話のテーマを「一人一人の育ちと学びがつながる幼保小連携」としております。問いを立てて，その問いについて一緒に考える形で進めていきたいと思います。

問いを４本用意しました。一つ目は，「幼保小連携・接続，具体的にはどんなことをするのですか」二つ目は，「連携・接続の背景，目的は何ですか」三つ目は，「幼保小連携が始まったころから年数が経ちました。新たな意義は何ですか」最後は，「推進していく際のポイントは何ですか」ということです。

一人一人の育ちと学びがつながる幼保小連携

Q1 幼保小連携・接続，具体的にはどんなことをするのですか？
Q2 連携・接続の背景，目的は何ですか？
Q3 始まったころから年数が経ちました。新たな意義は何ですか？
Q4 推進の際のポイントは何ですか？

推進する過程で，保護者の皆さんにも広がっていくことが大事です。保護者の方から，「幼保小連携をされているみたいですが，それはどういうことなのですか。」「何のためにされているのですか。」というような問いがあるかもしれません。保護者の方が，幼保小連携に関心を持ち，問いがあることは有難いことです。最後の問いは，保護者の方の問いに，どのように応えていくのかということでもあります。すでにいろんなことが整理されているとは思いますが，復習の意味も兼ねて，改めて一緒に考えてみたいと思います。

＊ 幼保小連携・接続の具体 ＊

具体的な活動例を書き出してみました。これ以外のこともあると思います。この中に「便りの交流」があります。学校便りは各学校から保護者向けに発行され，園でも園の便りを発行されています。地域によって，学校だよりが各園所に届く，園所の便りが学校に届くという形で交流されているところがあります。もともと作っているものですから，特別なことではないけれども，これを見るだけで，園の様子，学校の様子がよくわかります。すぐにできるいい方法だと思います。

Q1 幼保小連携・接続，具体的にはどんなことをするのですか？

①具体的な活動例
便りの交流　通信の作成・共通理解
相互訪問・相互参観　保育体験
行事ほか様々な交流活動
指導要録・個別の教育支援計画等の活用
カリキュラムの交流・編成・改善
【安心の中で一日を始める活動】
【合科的・関連的な指導】ほか

「通信の作成・共通理解」というのもあります。ここでの通信は，連携に関する取組などについて整理した通信のことであり，それを作ったり，交流したりして共通理解を図っていくということです。先ほどの発表の中で，光小学校では，「えがおのかけはし」という通信，緑ヶ丘小学校では，「きらり」という通信があるように見えました。中身まではわからなかったですが，このようなものを使いながら考え方や取組を共有したり，次に向けた動きが生まれたりすると思いました。

その他にも，「相互訪問・相互参観」「保育体験」「行事ほか様々な児童園児の交流活動」などもあると思います。さらに，「指導要録・個別の教育支援計画等の活用」「カリキュラムの交流・

編成・改善」というようなこともあると思います。

いわゆるスタートカリキュラムでは，「安心の中で１日を始める活動」「合科的・関連的な指導」などが言われています。例えば「安心の中で１日を始める活動」には，園や所で歌っていた歌を歌ったり，遊びを取り入れたりするということが，一つの方法として挙げられます。そのことによって，安心して１日を始めることができるということも報告されています。「合科的・関連的な指導」は，複数の教科等を合わせたような指導になっていきます。もともと幼児の遊びにおいては，いろんな領域いろんな中身が遊びの中にギュッと詰まっています。そこにノウハウが存在すると思います。イメージしにくい部分ではありますが，パイロット校の発表の中に具体的な実践が紹介されていました。光小学校の発表の中の，国語科の「くちばし」の実践。いい実践だと思います。そして生活科の「みずランド」。これらは合科的・関連的な指導として展開されている様子がよくわかりました。緑丘小学校の生活科の「あわあわランド」でも，そういうような様子を見ることができました。とても参考になると思います。

←この写真は，３歳１ヶ月の子どもが，ある状況を遊びとして，このように表現しました。どんなことがあって，どういう表現なのでしょうか。

ヒントをいいます。この子は保育園に通っています。保育園であるお話を聞きました。とても心に残ったんでしょうね。その話を家に帰って再現しているところです。何の話でしょうか。キーワードとしては，「それでも」とか「とうとう」ですね。最後のヒントです。小学校一年生の国語の教材にもしばしばなるお話です。

正解は「大きなかぶ」です。「～が～を引っ張って，～が～を引っ張って，それでもかぶは抜けません。」という文ですね。最後はとうとうかぶが抜けるわけですが，その話を思い出して，家でこのように表現をしています。面白いですね。アンパンマンもいますので，この時点で抜けそうな感じもしますけれども，ずっと，繋がっています。

なんでもないことのようですけど，ほほ笑ましくもあり，楽しいことでもあります。小学校の一年生が，国語科であるお話に出会い，それをみんなと一緒に考え，表現し，楽しんでいく。その一年生の中には，いろんな子どもたちがいて，ある子どもはすでに３歳１ヶ月でそのお話に出会い，このように表現しているということです。一方で，その場で初めてその話に出会う子どももいます。

これは典型的な一つの例として示しました。学校教育の中で行われるいろんなことについて，子どもたちのそれまでの経験，知識，力は，もう本当に多様です。その多様な子どもたちが，一つの教室で，一つの題材・教材・めあてで学んでいます。だからこそ，いろんな学びが可能になるわけです。決して一様ではないということは，心に留めておかないといけないと思います。

同時に，そういう一様でない様子については，この幼保小の連携を通して，「いろんなことがあるぞ。いろんなことを知ってる子どもがいるし，まだ出会ってない子どももいる。こんな経験を持っている子どももいるし，そうでない子どももいる。」ということが，リアルにわかってくる大事な部分だと思います。

幼保小連携で，具体的な活動はたくさんありますが，これを１人で進めることはできません。当然ながら担当者は大事な役目を担い，組織として行っていくことが大事になります。体制づくりとして，各校園所等内で組織を作り，全校体制，全園所体制で取り組むことが大事になると思います。これは学校でいうと，一年生の担任だけが関係するわけではなくて，六年生の担任の先生も専科の先生もみんな関係あるわけです。各自の当事者意識というのは，大事な部分になると思います。

一方，それぞれの校園所だけではできないことは，もちろんいっぱいあります。そもそも連携が大事であるとともに，連携協議会，エリアとしての組織が大事であり，そして今日のような自治体の取組も非常に大事なものであると思います。

組織づくりについては，でき上がった組織は，でき上がっているのでわかります。それがどのようにして作られていったのかということは，なかなかわかりません。わからないけれども，光小学校の発表の中に，「組織づくり」のプロセスがありました。これは，参考になると思いました。

＊ 連携・接続の背景と目的 ＊

連携・接続の背景と目的について，簡単に経緯を振り返りたいと思います。そもそも，連携・接続は大事なことです。一部のところでは，何十年も前から行われていたことです。今，改めて幼保小連携が展開していることについては「小一プロブレム」がきっかけになっています。この「小一プロブレム」は，小学校に入った子どもたちが「座って話を聞くことができない」「立ち歩く」「子どもたち同士で力を合わせて何かをすることが難しい」そういうことを指して「小一プロブレム」と言われました。20 年ぐらい前から言われたわけですけれども，プロブレムという言葉自体，「問題」ということを言っています。しかし，「この問題の本質は何なのか」という点において，気をつけないといけないことがあると思います。「小一プロブレム」というような状況は「入学までの状況に，教育・保育に問題があるのか」それとも「子ども自身に問題があるのか」あるいは「小学校に問題があるのか」と考えていったとき，本質はそういうことではありません。「連携や接続が大事」ということです。途中，随分省略して話をしていますが，そういうところに行き着くわけです。ですから，この問題の本質というのは，連携・接続の重要性に至ったということす。

そして，スタートカリキュラムが導入され，スタートカリキュラムスタートブックが作られました。最初に国立教育政策研究所が作り，この中に，基本となる考え方が整理されています。そういう動きの中で，この度の教育要領，保育所保

育指針，学習指導要領が改定され，学校段階等間の接続について，直接言及されるようになってきたことが，この背景や目的，大きな流れということになります。現在は，「かけ橋」という新たな動きもあり，今日はそこまでお話はできませんが，こういう背景で動いています。

スタートカリキュラムスタートブックは，16ページの冊子で，これが作られた時に全国の小学校，幼稚園保育所等に配付されました。自校にありますか。大事な考え方がわかりやすく書かれていますが，ちょっと弱点があります。薄いということです。薄いことは，簡潔に内容を示していて良いことでもあると思いますが，これを本棚に入れると，どこに入ったかわからなくなるという弱点があります。探したけれど，すぐに見つからないという学校や園所もあると聞いています。しかし，大丈夫です。国立教育政策研究所のホームページに，中身が全部掲載されていますので，そこで確認し，印刷することができるので安心してください。

その後，「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム」という新たな冊子も出ました。この冊子は1cmほど厚みがあって，背表紙もあるので，本棚に入れても見えなくなることはありません。

先ほどのスタートカリキュラムスタートブックには，スタートカリキュラムについて「小学校へ入学した子どもが幼稚園，保育所，認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として，主体的に自己を発揮し，新しい学校生活をつくり出していくためのカリキュラム」と書かれています。これはとても，画期的なことです。子ども自身が新しい学校生活をつくり出していくということ。学校生活に子どもを合わせるということではなく，子どもたちが自分の新しい学校生活をつくっていくという，子どもの側からの捉えになっています。

改めて接続･連携の背景や目的を一言，二言でいうと，「子どもたちが安心して自己を発揮し，自分の持っている力や知識・経験を十分に生かして，チャレンジし，そして成長する」ということです。

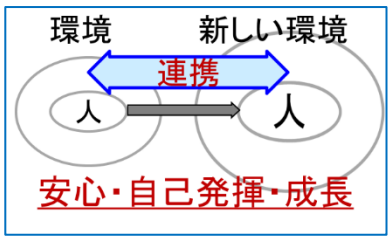
＊ 新たな意義 ＊

幼保小連携が始まったころから少し年数が経ちました。新たな意義について，少し考えておきたいと思います。そもそもこの接続は，どういうことなのかということです。

ここでいう接続は，環境のことです。私たちは環境の中で暮らしています。どんなにいい環境でも，ずっとそこで過ごすわけにはいきません。5歳児さんがどんなに幼稚園が大好きでも，保育園が大好きでも，一生を幼稚園や保育園の中で過ごすわけにはいきません。新しい環境に移行するわけです。ここの部分を接続と言っています。

以前の環境と新しい環境に何らかの連携があれば，安心して移行することができます。これがないと，不安で困ってしまいます。移行するときに不安や緊張は当然あるけれども，連携があれば，それが安心に変わり，自己が発揮できます。新しい環境においても，自己を発揮することができるということです。このように考えてみると，接続の問題は，幼児期から小学校への

接続だけではなく，小学校と中学校，あるいは中学校と高等学校，実社会，そこから先生涯にわたって接続の場面はあります。すべての人にとって大事なことです。その原理が，幼保小連携接続の中には入っているということです。



「安心して自己を発揮し成長する」ことは，誰にとってもあてはまることです。学校の先生方も，何年か経つと異動し，学校が変わります。これ自体が，これまでの環境から新しい環境への接続になります。その時に不安はあるけれども，新しい環境の中で，安心できるようになっていれば，新たなところでまた仕事を頑張ることができます。

環境の変化というのはすべての接続期に共通することで，激動の社会の中で，連携・接続の重要性は再認識されています。私たちはいろんな繋がり，連携の中でようやく生きているのであって，どこかで何かがあると，たちまち私たちの生活が脅かされるということは，いろんなことで身に染みていることです。未来に向けた諸課題は，私たちの生存に関係しています。同時に，この未来に向けた諸課題の原因を作っているのは，多くは人間ですので，諸課題への取組は，自分自身，人間への取組でもあります。このように考えてみると，連携・接続は，幼保小連携・接続ではあるけれど，ＳＤＧｓであり，大きくいうと人類の持続可能性にも関係する考え方になってくると思います。

＊ 推進の際のポイント ＊

Q4 推進の際のポイントは何ですか？

①学校や園所の実情にあった取組み
学校の規模や実態
関係校園所の数，実態や繋がり
取組みの歴史
子ども，家庭，地域の実態ほか

◇福山市立光小学校の発表事例
◇福山市立緑丘小学校の発表事例

最後に，推進の際のポイントについて，何点かお示ししたいと思います。

まず，学校や園所の実情に合った取組が欠かせません。光小学校と緑丘小学校の発表事例においても，その実情に照らして展開されていて，この両校関係エリアの協議会の取組は素晴らしいです。しかし，それをそのまま他のところでやって，上手くいくかというと，そうではないと思います。それぞれの学校や園所の実状に，どのように合わせていくのか，そこに合わせてどのようにクリエイトしていくのかということが大事になると思います。

それから組織的な取組と，各自の当事者意識。大切なことは，そもそも何のためにやっているのかということです。子どもの成長に繋がっていくことを大切にしていきたいわけです。そういう意味で，カリキュラムは紙で作られています。紙も大事ですけど，現実が大事です。
同じように計画は大事です。計画は大事ですが，実践が大事です。紙や計画にエネルギーを使いすぎて，ヘトヘトになって実際できないとなると，これは，残念で惜しいです。あるいは，紙や計画で終わってしまう，作ったけれど本棚や USB に入ったままとなると残念です。

マネジメントという視点では，１年目から完成したものを作る必要はなく，マネジメントし

ながらできる範囲で少しずつ積み上げてください。できないことをしようとすると，無理が生まれます。できることを積み上げていくことが大事です。緑丘小学校の発表では，昨年度の取組の振り返りと反省点が示されて，そこからスタートされていました。大事なことです。これがマネジメントです。マネジメントされて，いい実践になっていくと思います。マネジメントがなく，例年通りになってくると，実際の子どもの姿と解離が生まれてくると思います。

今は，激動の社会の中にあります。どんどんいろんなことが変わっていっています。デジタル時代を迎え，デジタル環境もデジタルテクノロジーの状況も，子どもたちはスマホの中で生まれ，デジタルのいろんな機器の中で育ってきています。そこの中で，心配なことはないのか，新たな力がどういうふうに発揮されているのかということは，未知のところです。子どもの姿を注視することは，非常に大事なことだと思います。

コロナ禍において，これまで夏に行っていた園でのお泊まり会をしていない子どもたち，あるいは運動会を経験していない子どもたちが，小学校に入ってきます。これまでとは違うと思います。小学校においても，２年間プール指導をしてなかったら，どんな状況になっているのか。大きな影響が出ていることは，想像できるところです。子どもの姿を注視し，良いところは「良いですね」と学校園所エリアで共有したいし，気になるところは「こういう姿があるんだけど，どうだろうか」ということで共有したいです。

最後になりますが，何より大事なのは，子どもたちの健康安全とともに，先生方自身の健康安全です。子どもたちとともに健康安全に過ごすことが，子どもたちの成長にとって大事なことだと思います。可能なところで留意しながら，取り組んでいただきたいと思います。

今日は福山市教育フォーラムとして，「一人一人の育ちと学びがつながる幼保小連携」について考えてみました。光小学校，緑丘小学校の発表や，いろいろな情報の中で，福山市の連携・接続が一層進んでいくことを願っております。

５ 協議 「子どもの育ちと学びをつなぐ」

市教委　朝倉先生が，「一人一人の育ちと学びがつながる幼保小連携」というテーマで，皆さんからの問いを想定し，それに応えてくださる形でお話してくださいました。光小学校区と緑丘小学校区の実践を取り上げて話をされながら，最後には，「他の実践事例をそのまま取り入れても，なかなか上手くいかない」ということも言われ，学校や園所の実情にあった取組が大事だと話されていました。それでは，これから福山市の取組，パイロット校区の実践発表，朝倉先生の講話を踏まえ，各会場で協議を行っていただきます。

協議内容をお伝えする前に，幼保小連携教育推進アドバイザーである今井先生が，合同研修会の中で最後に話された言葉を伝えさせてください。

福山市幼保小合同研修会（今井教授の講話より）

「大事なことは，就学前から遊びと生活経験の中で，学校の学びの準備をすることです。
これは決して『文字や数を早くに教えてください』『計算を教えてください』ということではありません。
就学前から言葉と数に『興味をもつ』ことです。
興味をもって言葉を知ろうとしたり，数を見ようとしたりして，直感的な感覚を育てていくことが，認知能力，推論能力の向上につながっていきます。」

「大事なことは，就学前から遊びと生活経験の中で，学校の学びの準備をすることです。これは決して『文字や数を早くに教えてください』『計算を教えてください』ということではありません。就学前から言葉と数に『興味をもつ』ことです。興味をもって言葉を知ろうとしたり，数を見ようとしたりして，直感的な感覚を育てていくことが，認知能力，推論能力の向上につながっていきます。」と言われていました。

先ほど，実践発表後の質問の中で，書くことが難しい子への個別の支援についての質問がありました。先生が書かせようとして，子どもの興味を失わせるようなことがあれば，それは支援にはならず，何をも向上しないのだと思います。

協議内容（各会場）

「子どもの育ちと学びをつなぐ」

子どもが興味をもって
言葉を知ろうとしたり
数を見ようとしている場面

↑記録はこちら

このことも踏まえて，「子どもの育ちと学びをつなぐ」という分科会のねらいのもと，協議を進めていただきたいと思います。光小と緑丘小学校区の発表にも出てきましたが，子どもが興味をもって言葉を知ろうとしたり，数を見ようとしている場面は，それぞれの小学校区で，様々に見られると思います。その姿を協議の中で，出し合ってください。

・・・・・・・　各連携校区で協議中　・・・・・・・

【松永小学校区　協議シート】

	A	B
1	子どもが興味をもって、言葉を知ろうとしたり、数を見ようとしている場面	
2	シールを列に並べて貼っている時は，数について興味をもっていると考えられる。	食べ物の名前を知ろうとしているとき。 違うものを色で関係づけようとしているとき（トマトとイチゴの色の関連）
3	幼稚園では日付調べをしたり，休みの人の数を数える，時間を教えるといった生活ととても関わりのある数を知る時間をとる。	自分の名前のひらがなを生活の中で見つけるとき。
4	絵本を読むとき。好きな絵本を何度も読んでいるうちに読めるひらがなが増えてくる。 絵と言葉を関係づけるとき。	友達とおしゃべりをしていく中で言葉を獲得していく。
5		
6		

... | 11光小 | 13蔵王小 | 14千田小 | 21箕島小 | 22高島小 | 26坪生小 | 27春日小 | 28神村小 | 29本郷小 | 32松永小 | ...

準備完了

市教委　これから全体共有させていただきます。たくさん出していただいた中で，園所の様子が書かれている松永小学校区さん。是非，園所の先生方の中で，どなたか紹介していただけませんでしょうか。

松永幼　松永幼稚園では，言葉ということで，例えば，毎日の朝の会で，日付調べをしています。その中で，数字について，８月１日（ついたち）は，１日（いちにち）じゃなくて，１日（ついたち）だよとか。そういう言葉を伝えていったり，「今日のお休みは誰かな。今日，何人かな」とか，そういうお話の中でやりとりしたり，数に興味を持ってもらえるように，ちょっとした工夫をしています。教えるということじゃなくて，自然に子どもたちの耳に入っていけるような形をとっています。今だったら，カブトムシがたくさんいますが，カブトムシであれば，「かぶとむし」とひらがなで書いて，イラストをつけています。字が読めない子でもわかりやすくわかるように，ちょっと視覚支援をしたりして，文字に興味を持てるようにしています。

市教委　突然お願いしたにもかかわらず，具体的に話をしていただきありがとうございました。このようなことがきっと他の園所でも見られるのではないかと思います。是非，皆さんが挙げてくださったこの場面を，各園所学校で，大事にしていただきたいと思います。

先ほどの動画にもありましたけど，子どもたちが遊んだりしているときに，「もうちょっと入れて」「ほんのちょっと」だとか「ちぎる」「しぼる」だとか。こういった言葉を使っています。どこでこの言葉を覚えたのかなと思いますが，子どもは，言葉を習ったわけでもないけれど，生活の中で聞いて，見て，話して，そういう中で，自分が使える言葉を増やしていっているのだと思います。

学力の基盤となる言葉と数を子どもが手に入れていくためには，たっぷりと遊んだり，体験する場をとって，友だち同士で知っていることを伝え合ったり，自分の経験とつなぎ合わせて考えたりする時間が大切なのだと思います。各園所学校で，子どもたちがどのように遊びながら学んでいるのか。まずはお互いに知っていくことを大事にしてもらって，今後も，連携接続に向けた協議を進めていただきたいと思います。今日出していただいた子どもの姿は，とても貴重な情報となります。私たちの役割は，このような子どもの姿を守って，壊さないように，大切に育んでいくことなのではないかと思います。

～ 子どもが興味をもって言葉を知ろうとしたり，数を見ようとしている場面 ～

（協議で出た意見）

＊ 絵本で絵と言葉を結びつけるとき
＊ 自分の名前のひらがなを見つけたとき
＊ 掲示物や看板を見ているとき
＊ 給食のメニューを読もうとしているとき
＊ 図鑑を見て生き物を探しているとき
＊ 「こぼした」「落ちた」など違いを考えるとき
＊ 身長や体重を測っているとき
＊ 日付や時刻を見るとき
＊ 休みの人数を数えるとき
＊ 栽培している花や実の数を数えるとき
＊ 縄跳びで跳んだ数を数えるとき
＊ チーム分けの人数を考えるとき　等